

# ある「在韓日本人妻」の生活史

—日本と韓国の狭間で—

山 本 かほり

## 1. はじめに

本稿でいう「在韓日本人妻」<sup>1)</sup> (以下「日本人妻」と略すこともある) とは、日本の朝鮮半島植民地支配時代に朝鮮人男性<sup>2)</sup>と結婚し、現在も韓国で暮らす日本人女性<sup>3)</sup>のことである。彼女たちが朝鮮人男性と結婚した経緯や結婚した場所などは様々であるが、(1) 日本の植民地支配時代に日本に居住していた朝鮮人と結婚、1945年の敗戦(朝鮮人にとっては解放)前後に夫とともに朝鮮半島に渡ったケース(2) 敗戦以前から朝鮮半島に居住していた者が朝鮮人男性と結婚、そのまま残留したというケース(3) 「満州」や中国に居住していた日本人女性と朝鮮人男性が結婚、敗戦後韓国へ引き上げたという3つのケースに大別することができる。このうち(1)のケースにあてはまるものが大半を占めている。

韓国での生活が50年近く過ぎる間に、日本人妻たちは韓国内の厳しい反日感情、朝鮮戦争、政治的混乱、そして日韓の国交断絶といった様々な社会的歴史的出来事に直面し、同時に個人的にも貧困、家族の崩壊、親族や地域からの孤立など多くの困難を経験してきた。

しかし、彼女たちはその状況にじっと耐え忍んできたわけではなく、生活者として、自らの生活を維持しようとしてきた。様々な歴史的社会的変動に巻き込まれながらも、それらに対応し、今日まで生き抜いてきたのである。本稿では、あるひとりの日本人妻から聞き取った生活史の記録を中心に、彼女が

どのような経緯で朝鮮人男性と結婚し、その後、「日帝36年」<sup>4)</sup>の苦しみから生まれた韓国内の激しい反日感情の中、植民地支配をした国家の国民のひとりとしてどのように生きてきたのか、そして何を支えとして異国での生活を貫いてきたのかを描き出してみたいと思う。

さらに、日本人妻としてどのようなアイデンティティを保持しているのかという問題も考えてみたい。「内鮮一体」「内鮮結婚」という日本の植民地政策の下で、結婚当時の日本人妻たちの意識では「国際結婚」ではなかった。日本国内(=「内地」)、または日本文化や日本的秩序が中心の植民地下の朝鮮半島で生きていくことを前提とした結婚であった。しかし、日本の敗戦とともに状況は一変し、彼女たちは「韓国人の妻」として、韓国文化、韓国的秩序を受け入れながら生きて行かざるを得なくなった。それと同時に「日本人」という民族意識を強固に抱き、それを支えとしながら自らの人生を切り開いてきたという面も見ることができるのである。このように、価値観や社会状況が逆転した二つの世界を生きてきた日本人妻のアイデンティティを考察することは非常に興味深い問題だと思うからである。

尚、本稿では、生活史の記録を資料として紹介することに多くの紙面を使用した。日本人妻に関する実態は今日までほとんど明らかにされておらず、日本や韓国の政府機関が公表したデータも無く、日本人妻たちの総人口でさえも正確には分からないという実情、また先行研究も非常に少ない<sup>5)</sup>という現状では、現在までの調査は「やっとスタートを切った」という状態に等しく、分析と結論づけはもっと後の作業であると考えているからである。そして、在韓日本人妻に関する調査・研究は現在も進行中であり、ここで扱う記録は非常に限られたものでしかないことを断っておきたい。

## 2. 調査の概要

### 2-1: 生活史調査について

在韓日本人妻の調査を行うにあたって、唯一手掛かりになるのは「芙蓉会」

という日本人妻たちの相互扶助と親睦を目的とした会である。<sup>6)</sup> 調査は、この芙蓉会の会員を個別に訪問し、それぞれの「生活史＝ライフヒストリー」を聞くという「生活史法」を用いた。

在韓日本人妻の実態がほとんど分かっていないという状況では、その全体像を把握するために数量調査を用いることも有効であることは承知している。実際、試みとして調査票を作成したこともあるが、「母集団」の設定が非常に困難であり、現在までのところ実施には至っていない。「芙蓉会」の名簿を使用し、ソウルや釜山などの「都市型」と他の地方の「農村型」の比較なども考えたが、名簿に載っている者のうち実在が確認できない者の人数があまりにも多く、断念したというのが実際のところである。

こう述べると消極的な消去法により、「生活史法」を用いたという印象を与えるかもしれないが、それ以上に「生活史法」の積極的な意義を認めた上での選択であったことは明言しておきたい。谷富夫は「生活史法」の可能性の一つに「異文化理解」を挙げている。<sup>7)</sup> 在韓日本人妻たちが辿ってきたライフコースは、私たちの「日常」の想像をはるかに越えるものであり、その意味においてまさに「異文化」である。その彼女たちの生活世界（＝異文化）を理解するためには、彼女たちの立場からそれを記述することがまず必要であろう。そのためには個人の歴史の深みや細部に触れることのできる生活史の聞き取りを行うことが、非常に有効な方法だと考えたのである。そして、正史には決して記述されることがない日本人妻たちの細部にわたる生活史を通して、日本と韓国という二つの文化の間に生きるということ（＝異文化体験）がどうということなのかを読み取る可能性を探ってみようとしたのである。このような立場から「生活史法」を有効な方法として用いることにした。

しかし、その「生活史法」の有効性を活かし切れなかった面も多いことは認めなくてはならないだろう。「生活史」とは語り手が一方的に構成するものではなく、聞き手との相互作用によって構成されるものである。言い換えれば、「語られる生活史」に対する聞き手の「理解力」がそのまま反映されながら生活史

は構成される。在韓日本人妻たちが語る「生活史」は私の想像力を越えるものが多く、日本人妻自身が「あんた（＝私）に話しても分からないだろうけど」とか「若い人（＝私）に言う話ではない」と言いながら、語る内容を取捨選択したことも多かった。その意味において本稿で使用する「生活史」の記録は、私の人間的未熟さがそのまま表れたものになっていることは否定できないことである。

## 2-2：調査の手順

調査を開始したのは1992年3月である。芙蓉会ソウル本部の事務所を訪ね、当時の会長に調査の依頼をし、ソウルの月例会（毎月16日）に出席させてもらうことにした。月例会の参加者は毎月平均60名前後で、昼食を食べ、会員同士で世間話をして帰っていくという親睦会の性格が強いものである。平均年齢72才（芙蓉会統計）という高齢者の集まりのためか、最初は雰囲気戸惑いを感じたが、少しずつ慣れるにつれて、無差別に会員たちに話しかけることができるようになった。この時点で、渡韓年や結婚した年や日本での出身地などを尋ね、後日、自宅を訪問し、もっと詳しい話を聞かせてもらいたいと調査の依頼をした。しかし、過去から現在に至る生活の全過程を聞くという生活史調査の性格上、かなり立ち入ったことも聞かなくてはならず、ラポール作りは非常に困難で、「日本にいる親族に迷惑がかかる」とか「子供たちが嫌がる」という理由で拒否されることも何度となくあった。結局、個人への聞き取りが実現したのは12月である。また、この頃より地方支部の例会にも出席し、ソウルで行ったのと同様の方法で調査への協力を依頼した。このような形式での調査は1993年3月まで続け、さらに1993年7月、8月にも同様の形式で調査を行った。また、1993年5月と10月にも補充調査を行っている。例会での予備調査も含めると、その延べ人数は40名程になるが、実際に生活史の聞き取りを実施できたのは、現在までのところ20名である。<sup>8)</sup>

インタビューの時間は1回に2時間から3時間、原則的にはテープへ録音したが、状況によっては、聞き取りをしながらメモを取るのみとし、調査後すぐ

に調査ノートを作成するという方法を取ったものもある。最低2回の訪問（ケースによっては5度以上の訪問をした人もいる）を心掛けたが、地理的な条件の制約のため1回しか訪問できていないところもある。ほとんど一人で従事した調査であり、対象者の多くが地方都市からさらに奥まった農村部に居住しているという地理的な問題、そこから発生する時間的制約、さらには日本人妻たちの高齢化に伴い、記憶が非常に曖昧であったり、耳が遠いなどという身体的問題が重なり、思ふような調査ができず、歯痒い思いを何度もした。従って聞き漏らしていることも多いと思う。

調査では、できるだけ語り手のペースで語ってもらうように心掛けたが、聞き手である私の存在が語る内容を自ずと規定していることも事実である。私の関心、質問内容に規定された生活史であり、また、語り手の自らの都合によって内容は取捨選択されている場合もある。私は対象者の全生活過程を把握しようとし、個人と社会、個人と家族/親族、個人と国家（日本と韓国）などとの関連をできるだけ詳細に語ってもらうように語りの流れを方向づけたことは事実である。これだけは聞くという項目をノートに事前に記し、チェックをしながら聞き取りを進めたことも多い。

また、使用言語は日本語と韓国語の併用である。都市部の中産層は日本語が中心、農村部及び都市の貧困層は韓国語が中心である。生活史の記録を資料として扱う時には韓国語で語られたものは日本語に訳したが、彼女たちの韓国語は、生活の必要性から習得されたもので、日本語の訛りを残し、さらには居住地域のサツリ（方言）が強く出るものである。まさに「生活語」としての「韓国語」であり、私が日本語に置き換えた時に、そのニュアンスを出し切れないことは断っておかなくてはならない。

### 3. 生活史の記録

#### 3-1：全体素描

具体的な事例の紹介に入る前に、日本人妻たちの国籍、現状などについて、

芙蓉会の名簿と聞き取りのデータを基に若干の説明をしておきたい。まず、日本人妻の国籍であるが、「日本籍」「韓国籍」「二重籍」の3つに分かれている。各国籍所持者の内訳は、1991年の芙蓉会（ソウル管轄のみ）統計では日本籍＝164名、二重籍＝150名、韓国籍＝170名となっており、ほぼ1/3ずつである。日本人妻たちの国籍がこのように3分した理由は単純ではないが、その経緯を簡単に述べると次の通りである。韓国籍の者は、朝鮮人男性と結婚し婚姻届を出したことによって夫の戸籍に入籍、それに伴って日本の戸籍からは除籍された者である。<sup>9)</sup> 日本籍と二重籍の者は様々な理由から婚姻届を出さなかった者である。その理由の多くは、結婚に際して家族や親族から反対を受けたこと、また、韓国に夫の本妻がいたため婚姻届を出すことができなかったというものである。このうち二重籍の者の多くは、1950年から1953年の朝鮮戦争の時に北朝鮮から避難してきた「避難民」を装い、仮戸籍を作り韓国籍を取得したが、日本の戸籍はそのまま残されているというケースである。但し、日本も韓国も法的には「二重国籍」を認めていないので、芙蓉会の支部によっては、本人の希望に従って「韓国籍」か「日本籍」のどちらかに整理する「国籍整理」事業を行ったところもある。

また、日本人妻たちの生活程度について、前出の芙蓉会統計では「上」「中」「下」「極貧」の4つに分類<sup>10)</sup>している。それによると、上＝2名（0.4%）中＝101名（20.9%）下＝117名（24.2%）極貧＝264名（54.5%）となっており、生活困窮者が圧倒的に多い。このような貧困層にある日本人妻たちに対しては、日本大使館や日本人駐在員夫人たちのボランティアグループである霜月会、慶尚北道の慶州にある日本人妻のための老人ホーム「ナザレ園」<sup>11)</sup> などから援助金が支給されているが、どこも財力に限界があり、日本人妻の現状に十分対応しているとは言えない状況である。

以上、日本人妻の現状に関する補足である。以下、具体的な事例を見ていくことにしたい。

### 3-2：事例紹介

本節では、内田なみさんという一人の日本人妻の生活史を中心に取り上げる。調査は1993年2月から10月にかけて延べ8回にわたって、練炭倉庫を改造したというわずか1帖ほどしかない内田さんの自宅で行われた。使用言語は時折、韓国語が混ざるが、ほとんどが日本語である。要約的な記述の部分以外は、テープから再現したものである。韓国語の部分は基本的にはそのままカタカナ表記し、{ } 内に日本語訳を付けた。編集、構成は私によって行われた。( ) 内は私による補足である。また、プライバシーに関わることが多いので氏名、地名は全て仮名とした。

#### <基礎データ>

調査日：93/2/16 3/26 5/15 7/17 7/24 8/14 9/4 10/23——ソウル  
市内の自宅にて

生年月日：1924年3月（調査時満69才）

国籍：韓国

出身地：関西地方 D 市

最終学歴：小卒

結婚年：1942年 D 市にて（本人18才、夫22才）

渡韓年：1948年

居住歴：日本 D 市→全羅南道 J 市→全羅北道 K 市→各地を転々→ソウル市  
生殖家族：夫=1922年生、全羅南道出身、17-18才の頃、D 市にいたおじを

頼って来日。1964年8月（旧暦）胃癌のため死亡

長女=1944年生、日本生まれ、高卒。既婚だが夫は死亡。ソウル  
市在住、会社員

長男=1948年生、高卒 既婚 会社員 ソウル近郊在住

次男=1952年生、高卒 銭湯で垢すりの仕事をしていたが、現在は日本で働く。27才位で結婚したが離婚。1980年生の長女を内田さんに預けている。

ある「在韓日本人妻」の生活史

三男＝1956年生、高卒 銭湯で垢すり

養女＝1968年生、小卒 ミシン工

収入：日本人駐在員の家で家政婦の仕事を週1-3回し、平均して月15万ウオン程度。ナザレ園、霜月会などからの援助が月約10万ウオン。

住居：ソウル市S区にあるサントンネ<sup>12)</sup>（山洞内）と呼ばれる貧民街に居住している。借家で、練炭倉庫を改造した1帖ほどの部屋。（保証金＝30万ウオン 月＝8万ウオン）台所は内田さんが部屋の入り口付近に石油コンロを置いて、台所として使用している。水道、トイレ（くみ取り）は4世帯共同使用。暖房は練炭アグンイ<sup>13)</sup>で、冬になるとしばしば軽い一酸化炭素中毒に悩まされる。

耐久財：テレビ、電気炊飯器

身体的状況：糖尿病の気はあるが気にするほどではない。足腰はしっかりしている。

## <生活史>

### I. 結婚まで

内田なみさんは1924年にD市で9人兄弟の7番目の子供として生まれた。父親は銀行の支店長の「こづかい」として働いており、「特に豊かでもなかったが、特に貧しくもない」という暮らしぶりだったという。

小学校6年の終わり頃、母親が死亡。小学校卒業と同時に内田さんは同じD市内の家に「女中奉公」に出る。最初に行った所は、近所の人の紹介だったが、「行ってみたら置屋だった」。しかし、幼かったので事情がよく分からず、しばらくはそこで働いていた。その内に事情を知った父親が別の家で奉公をするよう世話をしてくれた。その奉公先の主人の転宅に伴いながら、関西地方を転々としたが、17才になる頃に軍需工場（製缶工場）に勤めるようになる。そこで、後に夫となる金在貞（当時の日本名＝金平洋太）と出会い、恋愛関係になっていく。この頃のことを内田さんは次のように回想する。



「どっちからという訳でもなく、お互いに。気がついたらな。へへエ、まあ、好きになったんやな。私はまだ17(才)か18の頃やろ。初恋やったし、他に男も知らんから、火がついてな。あん時は『この人しかアカン』って思うたもんな。

韓国人—あの頃はチョウセン人ってゆうとったけど、(夫が朝鮮人であることを)知っとたよ。もう、火がついて好きになってしまったら関係あらへん。うん、あの頃が一番良かったな。映画見て、ボート漕いで。楽しかった。」

結婚を決心したのは内田さんが18才、金在貞22才の時であった。しかしながら、内田さんの父親は「チョウセン人なんかアカン」という理由で大反対する。それでも内田さんは、「結婚したかったからな、トーマンヘボリョッチ {家出した}。オヤジ (夫のこと。以下も同様) が住んでいた2階屋に駆け込んで、生活を始めたよ。結婚式なんてあらへん。お父さんの反対はすごかったから。私が出た後も大分私を探したらしい。(私の) すぐ上の姉さんが私らの結婚を応援してくれてな。姉さんがたまに遊びに来て、そう言っていた。」

当時、「内鮮一体」という政策を推し進めていた日本政府は、その「完成の促進上極めて望ましいこと」として朝鮮人と日本人の結婚(=「内鮮結婚」)を奨励していた。「内鮮結婚」した者に対しては日本政府が表彰をしたということもあるようである。<sup>14)</sup>しかしながら、そのような日本政府の意図とは別に、在韓日本人妻となった者の多くは、「自由な」恋愛の相手がたまたま朝鮮人男性だったに過ぎず、恋愛の結果として結婚を選択しただけのようである。<sup>15)</sup>そして、また、その家族も日本政府の意図とは逆に、「朝鮮人との結婚」に強い抵抗を感じ反対をしたケースが多い。その家族の反対を押し切って結婚生活を始めた日本人妻が多いが、彼女たちの意識では、それは「日本人同士の結婚と何も変わらない結婚」であったのである。つまり、日本文化、日本的制度の中で生きて行くことを前提とした結婚であり、夫が持つ朝鮮文化をどう理解していくのかということは考えもしなかったのである。次の内田さんの言葉に、この意識がよく表れているだろう。

『チョウセン人はアカン』って言われたから、違う国の人との結婚とは意識したよ。でも、あの時は韓国に来るなんて思ってもみななかったし、大体、オヤジもあの頃は日本の名前を使ってたしなあ。日本語もうまかったし。日本人と何にも変わらないのになって思ったねえ。ずっと日本に住むと思ってたよ。韓国の言葉とか習慣なんか習う必要も無いって思うてたよ。」

しかし、日本の敗戦によって、結婚にあたっての内田さんの「前提」は崩れ、朝鮮人男性をたまたまにしろ、夫として選択した彼女の人生は大きく変わっていく。

## II. 渡韓まで

結婚の時には大反対した内田さんの父親も、2年後に内田さんに長女が誕生したことをきっかけに二人の結婚を承諾した。そして、敗戦後は父親と同居し、夫の在貞が経済的に面倒を見ていたと言う。当時の在貞の仕事はK組という建設会社のトラックの運転手。当時の日本の水準から見れば、家族三人と父親が食べていくのに十分な収入だったと言う。

しかし、1948年に在貞の希望によって韓国へ行くことになる。その経緯は、「あの頃、日本には米が無くてな。オヤジは白い御飯を食べたいって。韓国へ帰れば、白い飯が食べれるから帰ろうって。私は来たくなかったし、お父さんも行くなって言ったよ。でもどうするの？娘もいたし、お腹に長男もいたし。付いて来るしかないだろう。今から思えば、(日本で)辛抱すれば良かったのにな。オヤジが帰ろう、帰ろうって言ったからな。お父さんが鞆持って、D駅(ターミナル駅)まで送ってくれたなあ。あれが、お父さんとは最後になってしまったなあ」ということである。そして、内田さんは佐世保から船に乗って釜山へ渡ったのである。結婚が内田さんの人生にとって第1の転機だとすれば、この渡韓の決意が第2の転機となったのである。

### Ⅲ. 渡韓後の生活

#### Ⅲ-1：夫の死まで

釜山からまずは在貞の故郷である全羅南道J市へ。ここでは在貞の家族と同居。この時期に長男を出産。そこでの生活はあまり覚えていないと言うが、「言葉もできへんし、寂しくて日本のお父さんに『帰りたい』って手紙を書いていた」と語る。J市には1953年の朝鮮戦争終結の頃まで住み、その後は全羅北道のK市に一家で移住していく。朝鮮戦争時は、「日本人だと北朝鮮軍に殺される」と思って避難したとか、「夫が行方不明になってしまった」などという辛い記憶を持つ日本人妻たちも多いが、内田さんにとっては、「J市は田舎だったから避難も何もないよ。そこにずっと住んでいたよ。私には何が起きているのかよくわからなかった」という程度の事件だったようである。

在貞の実家は元々田畑を多く持つ地主だったと言う。しかし、内田さんが渡韓した時には、在貞の父親の病気により土地の多くは人手にわたり、母親が「5日市場<sup>6)</sup>」で「クッパン」と呼ばれる御飯と汁物の定食を売って生計をたてていたと言う。日々の暮らしは何とかなっても将来的に不安であるし、在貞が韓国でもトラックの運転手をしようと試験を受けたが合格しなかったということもあって、全羅北道K市への移住となったと言う。

K市に移住していった理由は「オヤジの従兄がそこで商売してたから、頼って引越して」というものである。K市では、在貞の兄弟と共同で精米工場を営んだ。親族に助けられ、商売も軌道に乗り、比較的余裕のある生活を営んでいたようである。

「生活は困らなかつた。家もあつたし、収入もあつたし。豚も犬も鶏も飼っていたよ。家の仕事をしてくれる人も雇っていたしね。K市には日本人（日本人妻のこと）もいて、困っている人もいたから世話をしてやったよ。Yさん（日本人妻のひとり）なんかは、工場の仕事の世話をしてやったし、オヤジが病

気の時には家に住み込みで働いてもくれたし。」

これらの内田さんの語りから、この時期が内田さんにとって、経済的にも精神的にも最も安定した時期であったことがうかがえる。渡韓初期から経済的に困窮した日本人妻が多いが、内田さんの場合は比較的恵まれた状態にある。その理由には、夫の親族に、ある程度の経済力があったということが指摘できよう。多くの日本人妻たちは、渡韓してまず夫の故郷に向かったのであるが、夫の実家や親族の貧しさ（ほとんどが土地を持たない小作農であったり、都市での日雇い労働に従事）を目の当たりにすることになる。ある日本人妻はその時のことを次のように回想している。

「韓国へ来てすぐに夫の故郷に行きました。そこに夫の親や兄弟が住んでいたんですけど、家はボロボロ。農業って言っても自分の土地ではないですからね。食べるものもない毎日。なんでこんな所へ来てしまったんだろうって、何にもどを通らない毎日でしたよ。」（Fさん、忠南在住）

このように日々の生活にも事欠くため、「借金が借金を生み」、渡韓以来、継続して生活が困窮しているものが多い。反対に、現在の生活が安定している日本人妻たちは、夫の実家が富裕な地主層であったり、都市部で自営業に従事していたというケースがほとんどである。内田さんの場合も、在貞の親族の経済的基盤に依存しながら比較的早い時期に精米工場という生活の糧を得、ある程度の財産を築くことができたのである。

さらに、在貞の親族との相互扶助も内田さんのこの時期の生活を支えた大きな要因として考えられる。韓国社会の親族の結合の強固さはしばしば指摘されることであるが、在貞の場合も家族/親族間で助け合いながら生活を支えた（＝精米工場の共同経営）ことが、内田さんの語りから分かる。そもそも、在貞が戦中に日本に行ったのも、「D市にいたおじさんを頼って」のものであったし、K市への移住も親族を頼ってのものであったことから、親族間で比較的強い相互扶助が存在していたことを読み取ることができる。

また、日本人である内田さんが親族から拒否されることなく、その一員とし

て、精米工場の仕事を手伝い、チェサ（法事）やチャンチ（祝い事）などにも参加していた。韓国料理を親族から教えてもらい、また、時折、在貞の好きな寿司などの日本料理を作ったりという生活であった。日本人だという理由で、韓国の親族から疎まれたり、追い出されたり、また日本語の使用を禁止され、近所の日本人妻との交流も制限されていたという日本人妻が多かったが、内田さんの場合は、そういうことを経験することもなく、むしろ内田さんの持つ日本文化との共存の形式を取っていたようである。

「シオモニ（義理の母）なんかは韓国語しか分からないから、韓国語を使っていたけど、オヤジとか（夫の）兄弟とかは日本語も分かったからな、日本語でもしゃべっていた。日本の人（日本人妻）も家によく遊びに来ていたけど、それも嫌がらなかったしな。日本の餅とかも作ったり、日本の食べものもあの頃はよかった。オヤジが好きでよく食べたしね。

それでもキムチとかコチュジャン（唐辛子みそのこと）とかチョソンカンジャン（朝鮮醤油）なんかの作り方は教えてもらったね。チョゴリとかも持っていたし。何かあれば（チョゴリを）着ていたよ。」

そして、この時期、内田さんにとって最大の支えは夫である在貞だった。日本で結婚して韓国に来てみると本妻と子供がいたとか、「日本人を妻にした」ということによって起きる親族や地域からの圧力に夫が耐えかねて、韓国人の女性を迎え入れたなどという例は、日本人妻の生活史を聞いていると枚挙にいとまがないが、内田さんの場合は、在貞が日本人である内田さんを色々な面で守り、異国での生活を精神的に支えた存在であったのである。以下の在貞について回想する内田さんの言葉から、そのことをうかがうことができるであろう。

「オヤジはいい人だった。私にも良くしてくれたしね。おとなしい人だったよ。（写真を見せながら）これがうちのオヤジだ。写真とか映画が好きなモッチェンイ（粹な人）だったよ。酒は飲んだけど暴れることはしなかったし。女もいなかったしね。<sup>17)</sup> この写真は全部オヤジが撮った。30年以上も前の写真だけどよく写っているだろう。子供たちは（写真を）捨ててしまえって言うけど、

捨てられなくてね。今から思えば、あの人（夫）も大変だったと思う。日本人の女を連れてきたってね。いろいろ言われたやろうし。でも、そうだからって私に当たることは絶対になかったね。」

この時期に、次男・三男の出産もし、子育てや家事、そして家業の仕事に追われる多忙な日々ではあったが、内田さんの人生の中では最も充実し幸福な時期であったのである。しかし、在貞が1964年8月（旧暦）に胃癌のため45才で死亡したことにより、内田さんの人生は大きく変わってしまう。夫の死が内田さんにとって第3の転機となったのである。

### Ⅲ-2：夫の死後

在貞の親族との相互扶助、そしてそれを基にして成立していた経済的な基盤は、在貞の死とともに一気に崩れてしまう。内田さんの説明によると以下の通りである。

「オヤジが死んだ後、マンヘッタ {落ちぶれた} ね。オヤジの入院とかでお金を一杯使ったし。クンチップ {夫の兄の家} とチャグンチップ {夫の弟の家} が全部財産を取り上げてしまった。ターカジョカッソ {全部持って行ってしまった}。私、あの頃、今よりも韓国語が下手だったからね。それに字（ハングルのこと）も読めないから、クンチップとチャグンチップが私をだまして、（財産を）持って行ったよ。あの時は、子供（長女）も20才そこそこで、よく（物事が）分かっていたいなかったから。今になって娘も「オグルハダ」ゴ {「悔しい」と} 言っているよ。

「契」<sup>18)</sup>にもね、クンチップがチャック {しきりに} 入れって言うてくるから、入ったけど、結局（お金は）戻ってこんかった。今でもその時の（入金を記した）紙を持っているよ。何にもならないけどな、でも、証拠だから。とにかく、（お金は）全部取られてしまったんよ。私は、あれら（夫の兄弟の家族）にお金を貸してやったこともあるし、それなりに世話をしてやったこともあるのね。ノームヘッソ {アンマリだ}。

そんなんでオヤジが死んだ後は苦労したな。やらなかった仕事は無いね。ノ

ムチベソ {他人の家で} 仕事もしたし (家政婦のこと)、旅館でも住み込みで仕事をし、工場もテンギョッタ {通った}。ソウルへ来たり、K市に行ったり、釜山に行ったり。スルチップ {酒場} でも仕事したなあ。仕事という仕事は全部やった。そうやな、家政婦の仕事が一番長いな。

ソウルへ来てから大分なるな。この家にもう10年やし、別の所にも住んでいたし。ソウルに来たのは娘が来ていたから。(娘が) 保険の事務をやっているから。

3月にアパート<sup>19)</sup>で掃除とか洗濯の仕事をする前は内職してた。しおりに紐を通すの。安いよ、100枚やって30ウオンだもん。アパートの仕事があったからもう辞めたよ。とにかく、私が働かないと。身体が動くうちはな。少しでもお金貯めて、もうちょっと広い家に行かんと。孫の背が大きいから、もう寝られなくなってしまう。」

以上の言葉から、在貞の死とともに、内田さんの親族間の相互扶助が無くなったばかりか、その親族から「裏切られる」ようにして、内田さんが孤立してしまっただということが分かる。ただ、なぜ、それまで支えあっていた親族が内田さんを切り捨てるようなことをしたのかは、何度調査に出掛けても明らかにならなかった。断片的に「韓国語もできなかったし、子供も十分に成長していなかった」ということは語られるが、それ以上のことは分からない。内田さんにとって唯一の支えだった夫を亡くし、一時期、内田さんの生活は随分荒れたようである。当時のことを振り返って、「チョンシンチャリ モッチャバッタ {精神の状態をコントロールできなかった} みたいでな。オヤジが死んだ後に酒を覚えたよ。死んでから、しばらくはよう酒飲んだ。毎日酒飲んでた。酒を飲むと辛いことが忘れられた」と語る。当時、子供もまだ十分に成長しておらず、親族や地域から疎外され、孤立し、かと言って日本に戻る術もなく、異国で一人途方にくれた日々を過ごしただろうことは想像に難くない。在貞の死後、約20年間の多くの部分が聞き手である私には空白となっているが、それは「誰にも語りたくない過去」なのだろうというように理解している。この時期の

ことに話が及ぶと口ごもり、「みんな、過去を持っているしな。私にも過去があり罪がある」というように語るのであるが、聞き手として、私はその言葉の重み、そして「空白」であることの重みを感じ取るだけにしたい。

ところで内田さんが従事してきた職種は、在韓日本人妻たちが従事してきたものの典型とも言える。多くの日本人妻たちが貧困層から抜け出すことができなかった理由のひとつに職業の選択の幅が非常に限られていたということを挙げることができる。解放（日本の植民地支配からの）後の韓国では、当然のことながら反日感情が高まっており、「日本人である」ということが常にマイナスの要因であった。敗戦前に渡韓して韓国で敗戦を迎えたある日本人妻は、

「解放前はね、ここでも日本と同じような生活だったのよ。皆が日本語を使って。まあ、今から思えば使わせていたんだけど。それが解放を迎えた途端に一遍に生活が変わって。日本語をしゃべるなんて怖くてね。道で知っている日本人に会うでしょ。でも怖くて話しかけられないのよ。その人が怖いんじゃないくて、周りの雰囲気。とにかく、日本人は嫌われたわね。」（Uさん、全南在住）と回想する。このような社会的雰囲気の中で日本人妻たちが行うことのできる個人的な努力は制限されたものであったと考えられる。また、韓国語も十分にできなかった日本人妻が労働力として進出できる場合は、農村では小作農としての農作業であり、都市部では、家政婦や行商といった不安定で肉体労働的なものに限られていたのである。内田さんの韓国での生活は、在貞の死亡時には既に16年になっていたが、それまでの生活が安定していたため、外に出て働くという必要性も無く、また前述のように夫に守られた生活であったせいか、「韓国語も満足にできなかった」と言う。そのような内田さんが就くことのできる職業は、やはり、家政婦や工場での歩合の仕事、または内職といった不安定なものでしかない。

また、日本人妻たちの韓国への移住が家族単位ではなく、韓国人家族の中にひとりで女性が入るといったものであったことから、日本人妻たちのコミュニティは成立しなかった。ましてや、家父長的な家族制度の影響を強く残した韓



国社会の中で、女性としての社会進出の機会も非常に制限されていた。<sup>20)</sup> もちろん、日本人妻同士の個人的な人脈や芙蓉会を通じての相互扶助や仕事の情報もあったが（日本で病院の付き添い看護や旅館などで賄いの仕事などを求め、一時は多くの日本人妻が日本へ働きにでたという）、それも限られたものであり、日本人妻の労働の場の提供という力には十分に成りえなかったということも指摘できるであろう。結果として、非力な個人としてしか社会に参入できず、参入にあたっては多くの壁（言語、民族、性）があったため、底辺労働を繰り返すしか選択の余地が無かったのである。内田さんの例もその典型だと言うことができるであろう。幸い、現在は内田さんの日本語の能力を必要とする家での家政婦の仕事が見つかり、さらに内田さんの明るい人柄と真面目な仕事ぶりが評価され、仕事の口が増えている。しかし、体調を崩せばその基盤も簡単に壊れるものであり、不安定であることには変わりがない。

また、現在、内田さんは在貞の親族とはほとんど交流がない。在貞の墓はK市にあり、チェサもK市にて行われているが、内田さんが行くことはなく、長男が行っているという。内田さんはひとりで自宅で在貞の命日と正月（旧）にチェサを行っているそうである。

### Ⅲ-3：子供との関係

<基礎データ>の項で紹介したように、内田さんには4人の実子と1人の養女がいる。（養女は在貞の死後、誕生しており、どのような経緯で養女にしたのかは、明らかではない。前述の「空白の20年間」と重なり合うため、深くは聞かないことにした。）儒教的倫理観が強く残る韓国社会では「長男が親の扶養をする」という私的扶養の慣習が残っており、子供の経済力が老後の生活を左右することが多い。しかし、内田さんはどの子供にも頼ることができない状況である。内田さんと子供との関係は以下の通りである。

「子供、四人もおおるけど頼りにはならん。娘はもう50才になるけど、旦那を亡くしてね。子供を二人、ひとりで育てているからね。男の子は今年大学に入って。女の子は高校出て働いておる。娘は滅多にここに来ないし、孫も家（内田

さんの自宅)がこんなに狭いからほとんど来ないよ。

長男は塩を作る工場に勤めている。結婚して家も持っているけど、私はあの嫁と合わない。(長男の家に)行くと『お金取りに来たのか?』って言うんだ。息子も結婚したら嫁さんのもんだろ。私が死んだらチェサをして祭るって言うけど、生きているうちに良くしてくれないと何にもならんね。

次男がここの孫(内田さんと同居中)のオヤジだ。小さいときから言うこと聞かなくてね、手を焼いていた。結婚したんだけど、働かないで酒飲んで暴れるから嫁さん出ていってしまった。それで、孫が学校上がるときに、ここに連れてきて、あれは別のところに住んでいる。風呂屋で垢すりの仕事をしているけど、金は全く持ってこない。米くらい買ってくれてもいいのに、そういうことは全然ない。最近(酒を飲んで)暴れなくなったけど、嫁さんが出ていった頃にはよう暴れて——。扇風機も壊してしまったよ。

孫の生活(経済的なことも含めて)は私がしてやるけど、学校の登録金(中学校の学費)までは(無理だ)なあ。あれ(次男)がせなアカンのやけど、お金も持ってこないし、連絡もたまにしかないよ。

末の息子はおとなしい子や。あれも兄貴(次男)と同じ風呂屋で働いていたけど、気が合わなくて、今はどっかに行ってしまった。連絡ないね、もう何ヶ月にもなる。あの子は私に対して良くしてくれたんだけどね。

養女は小さいときに……。 (養女にしたというニュアンス) いろいろ合って……。あの子は小学校もろくに通ってない。私が連れて歩いてたから。(小学校は)卒業したことになるけどな。今はミシン(工)をしている。学校出て、すぐにキスル{技術}を習ったから、今(月給は)80万(ウオン)位はもらっているやろ。養女が私のことを一番考えてくれてる。でも、あれも今は行方不明だ。変な男と暮らしていたけど、(別れたくて)逃げているんやろ。その内に、連絡あると思うけどな。」

このように子供との関係も決して望ましいものではない。長男・長女は自立した生活を送っているが、それぞれの事情で内田さんの扶養は不可能である。

次男に関しては、扶養どころか自立もできていない。次男が従事している銭湯での垢すりという仕事は歩合制であり、特に夏場は客も少ないことから、銭湯自体が休業となることが多い。従って、6月から9月の3ヶ月は無収入となる。この点に関しては三男も同じ状況であり、内田さんに経済的負担は掛けていないが、扶養までは手が回らないという状況である。

今まで生活史調査の聞き取りに応じてくれた在韓日本人妻の子供たちの経済的基盤も概して不安定なものであった。特に貧困層にある日本人妻の子供は、ほぼ全員が土木作業、タクシー運転手、行商、小作農といった不安定な職種に就いている。その要因として、まず第1に考えられるものは、学歴の低さである。経済的な理由で十分な教育を受けることはできず、義務教育の小学校を形式上は卒業しているが、満身に通学できなかったというケースも多い。学歴を重視する韓国社会で小卒、中卒の者が参入できる労働市場は極めて限られている。従って、2世である子供たちも親が従事していた職種と同種の職業に従事せざるを得ず、生活の上昇も期待できないという実情がある。

さらに、内田さんの次男のケースのように、小学校の高学年から高校時代にかけて「グレ」、その後、社会的成人としての義務を果たすことができないという事例も非常に多い。「日本人」を母に持ったということが、精神的/心理的、または社会的に2世たちの人生に大きく影響したことが考えられるが、これは2世に対する生活史の聞き取りを行うことによって明らかになっていくだろう。内田さんの次男に対しては、1度だけ聞き取りを行っているが、「自分には運がなかった」という言葉で、自分の人生を振り返るのみで、日本人である母親の子供として、どのような精神状態であったのか、または、そのことによる社会的影響などといった問題までには話が及ばなかった。ただ、内田さんとの関係を語る中で「お母さん（内田さん）の韓国語は下手すぎて、僕は小さいころから（母親が）何を言っているのかよく分かりませんでした。今でも日本語が混ざるし、韓国語も全羅道の方言ですからね、理解できなくてイライラすることが多いんです。僕の兄貴も同じことを言ってますね。」という発言をしてお

り、日本人妻と2世である子供たちの母子関係を理解する手掛かりにはなっていくと思われる。

反日感情が現在よりもさらに強かった1950年代、60年代に成長した2世たちが日本人である母親をどう捉え、どのように理解してきたのか、また、日本人との混血として成長する過程で心理的/社会的な影響があったのかということについては、今後、彼/彼女たちに対する生活史の聞き取りを行うことが必要不可欠であり、それを通して、在韓日本人妻たちがおかれてきた状況をより深く理解することができると思われる。

### Ⅲ-4：日本への里帰り

1945年の日本の敗戦から1965年の日韓条約締結までの20年間は、日韓の国交断絶という政治の壁に阻まれて、日本人妻たちが一時的にであれ、日本へ里帰りすることは不可能だった。国交回復後、法的には日本への里帰りが可能になったが、実際に日本に行くことができたのはある程度経済的に余裕のある者であった。また、国交回復直後からしばらくの間、渡航手続きが煩雑だったこともあり、芙蓉会が団体での里帰り事業を行っていたが、やはり、その費用は自費であり、参加できる者は非常に限られていた。

内田さんも、日韓の国交が回復した時には、すでに夫が死亡しており、日々の生活に追われている毎日で、日本への里帰りを考える余裕すら無かったという。また、日本の家族や親族との連絡も全羅南道J市にいた頃を最後に途絶えていたため、「生きているのか死んでいるのか分からない」という状況であり、「(里帰りは)自分には縁の無い話」と思い、日本へ里帰りすることは諦めていたという。

しかし、日々の生活に追われ、仕事に疲れた時に、「韓国に来たことを後悔し、日本のことを思い出し、タップタップヘソ {もどかしさと悶々とした気持ちがして} 泣いた」こともある。また、テレビや芙蓉会の人から日本の様子を聞かされると、「一度行ってみたい」という望郷の念にかられていたという。

そんな内田さんに里帰りの機会がめぐってきたのは1986年の5月のことであ

る。大韓民国居留民団（以下、「民団」と略す）が40周年記念行事の一環として、経済的理由のため一度も里帰りしていない日本人妻を8日間の予定で招待するという話が持ち上がった。芙蓉会を通じて内田さんもその対象者となり、念願の里帰りが決まったのである。

音信不通になっていた日本の家族捜しは、民団と日本の新聞社が協力。新聞記事を見たD市に住む姉（結婚の時応援してくれたという）が名乗りでて、手紙のやりとりが再開した。

この時の里帰りに参加した日本人妻は合計19名。5月19日に東京入りし、観光をした後、内田さんは22日に京都で姉と再会した。<sup>21)</sup>

「日本の印象？そんなことよりも姉さんに会えると思うとな、気はそっちに行っていたからあんまりな。そりゃ、（日本は）立派になったとは思ったけど。

（姉に）40年近くも会っていなかったから、ドキドキしていたな。でも、会ってすぐに（姉だと）分かったよ。もう会うこともないと思っていただけになあ。もう、胸がつまって、新聞の人がいっぱい来ていたけど、構わず大泣きしたね。姉さんの家に行って、3日泊まってな。お父さんの墓参りとか小さい頃住んでいた場所とか行って。懐かしかったな。あと飲み屋に行って、ドテ焼き食べたり、姉さんがおごってくれたよ。夜は一杯やりながら、思い出話をしたり、歌を歌ったり。あの時は、民団がお金出してくれたし、うん、着るもの（日本に行く時着る服「費用は出してもらっても、日本に行く時に着ていく服がない」という理由で参加を躊躇する日本人妻もいたと聞く。このような事情を民団も配慮したのであろう。）とか小遣いまでくれてね。夢の様だったね。」と回想する。そして、この里帰りをきっかけとして、それまで全くの孤立状態で韓国で生き抜いて来た内田さんにとって、日本に住む姉が心の拠り所となっていく。

「姉さんとはそれから（里帰り以来）手紙のやり取りあるよ。また、貯金でもして姉さんのとこに行って来ようか。でも、姉さんも福祉（生活保護）もらっているし、甘えられへん。姉さんに金があれば飛行機のお金だけで行って来れるんやけどな。金が無いから、（滞在費なども）私がやらんとやからな。でも、

手紙のやり取りだけでもな、まあ——（良しとしなくては）。もう日本の家族が連絡せんといてって言う人も（日本人妻の中には）多いやろ。韓国なんか行ったから恥ずかしいとか言うて。D市の姉さんは結婚の時にも応援してくれたし、うちのオヤジのこと褒めとったし。あの人にそういうの（韓国に対する偏見）は無いからなあ。姉さんにはあんまり遠慮せずに、いろいろ話せる。息子の愚痴とか。姉さんも息子には手を焼いているから、よく分かってくれるし。何か、（姉が）いて、私のことを少しでも思ってくれてると思うと気が納まるっていうかな。お互いにもっと近くに住んどったらええんやけど。うん、姉さんも75（才）やし、死ぬ前に、姉さんそこ、もう一回行って来とな。」

内田さんは1991年5月にも2週間ほど、ある一人の日本人事業家による里帰り事業に参加している。この時にも、姉の家に泊まり、数日間を楽しく過ごしたと言う。内田さんは何かあればこの姉に対して手紙を書き、気を紛らわせている。内田さんのお姉さんにも数回の聞き取り調査を行っているが、お姉さんにとっても内田さんは心の支えであり、月に1回のペースで来る手紙を心待ちにしていると語っていた。

#### IV. 内田さんを支えたもの

内田さんの生活史を聞いていると、夫、在貞の死後から前節で述べた日本に住む姉との連絡再開までの37年間、内田さんを支えた（精神面/物質面ともに）という人物はほとんど現れない。内田さんの語りから描き出されるこの時期の内田さんの姿は、韓国で、たった一人で底辺労働を転々としながら「その日暮らし」をしているというものである。「誰も助けてくれないよ。辛いとか苦労とか、そういう言葉では——（表せない）。死んでオヤジのところへ行こうかとも何回も思ったりなあ。」と語る。しかし、今日まで内田さんは韓国で生き抜いてきた。夫の死後、内田さんを支えてきたものは何だろうか？

内田さんが、どの仕事に就いている時でも、信条のように自らに課してきたのは「日本人らしくまじめに、そして正直に」ということだった。内田さんの

気持ちの根底には「日本人は韓国人とは人間の質が違う」という考えがある。これは「日本人としての誇り」とも言い換えることができるであろう。このような考えは、植民地支配時代から引き継がれたものであり、韓国人の夫を愛した内田さんにも根強く残っている。従って、「日本人は韓国人に嫌われているから、まずは韓国人に日本人がどれだけ立派か見せんとアカン」と自分に言い聞かせ、そして、「(自分には)金は無いけど、韓国人に馬鹿にされたくなかったしな。日本人の方が韓国人より正直やって(示したかった)。そのためにはウソつかんと、真面目に働かんと」ということを常に思いながら仕事を続けてきたと言う。そのひとつの例として、以下のようなエピソードを内田さんは語る。

「私、あっちこっちで家政婦しottaやろ。主人は私が日本人だって分かってる。私の言葉(韓国語)を聞けば、すぐ分かるよな。で、試すんよ。釜山におった時、(主人が)お金の入った財布をわざと家の中に置いておくんや。掃除してれば分かるようなところにな。それを私が取るかどうかを試すんよ。私は絶対取らないよ。『奥さん、財布が落ちてました』って、ちゃんと知らせてやる。そうすると、主人も『ああ、日本人はやっぱり正直者だ』って言って、信用してくれるようになる。あのね、(財布を返すことが)当たり前やと思うやろ。それは、あんた(私のこと)が日本人だからや。これ、韓国人の家政婦だったら、持って行ってしまうよ。でも、私も日本人やから、そんなことできない。10ウォンのお金だって取らない。洗濯していてポケットからお金が出てきても、私は主人に返すんや。日本人はそういうものやし、そうしないとますます韓国人から嫌われるからな。(日本人は)韓国人とは違うって、韓国人に思ってもらえないと。」

このような内田さんの言葉から「日本人」としての強い「民族意識」を感じ取ることができると思う。「劣っている韓国人」に後ろ指をさされるようなことだけはしたくない、「日本人はやっぱり立派だ」と韓国人に思わせなくてはならないと自らに言い聞かせ、それを支えとしながら、親族や社会からの完全な孤立状態の中で、内田さんは韓国での生活を貫いてきたと言うことができるので

ある。

そして、さらに韓国の生活が50年近くになるが、内田さんには韓国人の友人は一人もいない。現住の地域に10年居住しているが、近隣との付き合いもほとんど無い。「自分は日本人だから韓国人とは合わない」と言い切るのである。

しかし、同時に「日本には帰らない、帰れない」とも思い続けてきたという。その理由は「私は好きで（韓国人と）結婚したやろ。誰に頼まれたわけでもないし、お父さんは大反対したからな。そんなで、こういう生活（困窮した生活）をしているのは自分の罪だと思ってる。責任やと。だから、日本にはもう暮らせない、韓国でしか暮らせないよ。主人の墓はここ（韓国）にあるし、私も死んだら、そこ（夫の墓のある山）に行かないと」と言うものである。このような自分の選択に対する意地が、どんなに生活が苦しくても、韓国での生活を続けさせた、もうひとつの要因であることが指摘できるであろう。

「韓国で今後も住み、韓国で骨をうずめる」と決心している内田さんであるが、その「心」は常に日本と韓国の間を行ったり来たりしている。「日本人である」という強固な民族意識、前節で述べた「心の拠り所としての姉」という二つの点を見るかぎり、内田さんの「心」は日本にあるように思われる。しかし、現実として、日本にはもう住むことができないということも内田さんは明確に意識しているのであり、それが、韓国で住み続けることの決心にもつながっていると考えられる。もちろん、前述のように「意地」で日本への永住帰国をしないという面も大きいですが、同時に70才を迎えようとしている今となっては「日本に帰っても暮らせへんもん。私の国籍はもう韓国や。日本籍やったら帰っても姉さんのように福祉ももらえるやろうけど、私にはくれへんやろ。もう、ここで暮らすしかないやん。今から日本に戻ってどうするの」と言う言葉に見られるように、日本に対しては「諦め」<sup>29)</sup>の境地にあるのではないかと考えられる。「現実」としての韓国で生き抜くための精神的な支えとして「日本」を思う内田さんの姿があるのではないだろうか。そして、それをさらに強く支えているものが「自らの責任」で韓国に来たという「意地」と「誇り」であると言



うことができるのではないだろうか。

#### 4. まとめにかえて

以上、一人の在韓日本人妻の生活史の記録を紹介した。歴史に翻弄されながらも、韓国という異国での生活を貫いている女性の生き様を、口述の生活史より描き出そうとしたのである。韓国人の夫との結婚の経緯、そして渡韓、しばしの幸福な生活、そして夫の死、その後韓国社会の底辺を生きて来た姿、そして、現在の内田さんの心情の在り方などを描き出そうと、内田さんの語り口をなるべく壊さないようにしながら、資料として編集した。その際の私の視点は①内田さんを現在のような貧困状態に至らせた要因を読み取ること、そして②そのような状況の中で内田さんを生かしたもの(=「支え」としてきたもの)を読み取ることであった。冒頭でも述べたように、本稿は在韓日本人妻研究の全体から見れば「入り口」にしか過ぎなく、客観的/普遍的な法則定立を行うほどのデータはまだ集まっていない。私は、本稿で取り上げたデータとそれの採取方法を今後の研究のひとつの手掛かりとして考えている。

内田さんへの生活史の聞き取りは8回にわたった。1回につき最低でも2時間、長いときには5時間にもなったが、内田さんは常に快く調査に協力してくれた。

内田さんの住居環境は劣悪で、聞き取りは、二人で身体全体を折り曲げるような姿勢を取りながら行われた。また、冬の寒い時期に話をしていると、暖房用の練炭のガスが少量ながらもれ続けているため、頭痛に襲われることもあった。内田さんによれば「直してもな、この程度しかアカン。私も毎朝、頭痛くて、薬は手放せない。雨が降って湿気ると、もっとひどくてな。身体が動かない時もあるんよ」という状態である。しかし、内田さんが現在の家を出る日も近い。内田さんが現在住んでいる地域全体がソウル市の再開発地域に指定され、1994年の4月位には立ち退きが始まるといわれる。まだ、ソウル市が支給する補償額等、未決の部分が多いが、内田さん自身は、今まで、苦しい生活の

中から少しずつ貯めた貯金と合わせて、もう少し広くて、設備の整った家へ移れたらと願っている。

さらに、1993年10月より次男が日本海側のある都市の建設会社で土木作業員として就労している。日系人に対して発給される就労ビザを取得しての就職である。芙蓉会の存在を知った建設会社の社長（＝日本人）が2世たちの受け入れを積極的に行っており、<sup>23)</sup> その一環として次男は日本へ渡った。送り出すにあたって内田さんは「初めは言葉も分からないし、きっと食べ物も口に合わず苦労するやろ。私も50年前はそうやったし。でもチット辛抱して、真面目に働いて、金でも稼いでくれたらな。ここだと甘えて仕事も真面目にやらへんし、全部酒飲んで使ってしまうから。逃げ場のない日本で頑張ってくれたら——。日本で働いたら、私の苦労もチットは分かるやろうな。でも、ここにいたらたで心配やし、（日本に）行ったら行ったで心配や」と語っている。現在、三男も日本で働こうとビザを申請中だという。2世が日本で働こうとする動機は、経済的メリット、日本の進んだ技術や日本語の習得が主なものであるが、同時に、母の国＝日本で働くことを通して、2世たちが母親に対する理解を深める契機となるかもしれない。2世たちの日本での生活はまだ始まったばかりで、その結果はでていないが、彼らが、母親とは違った面で日韓両国のかけ橋になる可能性も十分考えられるであろう。

#### 註

- 1) 現在の北朝鮮にも同様の歴史的背景をもって暮らす日本人妻が存在していることは十分考えられるが、南北分断という政治的状況のなかで、北朝鮮に暮らす日本人妻の調査を私が行うことは不可能である。調査の場が自ずと韓国国内に限定されたことから、本論文では「在韓日本人妻」という呼称を用いることにした。
- 2) 本稿では朝鮮人/韓国人という呼称の区別は厳密ではない。原則として1945年の敗戦以前は朝鮮人、それ以後は韓国人とした。朝鮮半島/韓国という呼称についても同様の区別をする。
- 3) 1965年に日韓条約が結ばれ、両国の国交が回復して以来、多くの日本人が韓国に居住

するようになった。その中には韓国人男性と結婚した日本女性もいるが、彼女たちとここでいう「日本人妻」とは歴史的にも社会的にも異なった背景を持つので区別して考えられなければならない。

- 4) 1910年から1945年の日本の朝鮮半島植民地支配のこと。この期間を韓国の歴史区分では「日帝時代」と呼ぶ。
- 5) 私の知る限りでは、金應烈「在韓日本人妻の貧困と生活不安」(『社会老年学』No. 17.1983)と小林孝行「戦後の在韓日本婦人についての基礎的研究」(『福岡教育大学紀要』第36号、第2分冊、1987)の二つがあるのみである。
- 6) 芙蓉会の前身は1962年にできた「弥生会」であり、その後「在韓日本婦人会」と改称。さらに1966年に「芙蓉会」となった。1963年に韓国政府より社会团体としての公認を受けている。ソウル市に本部を置き、全国に11の支部を持っており、登録会員数は1991年5月作成の名簿では744名(ソウル管轄484名、釜山管轄260名)となっている。過去30年の間に、日本人妻たちの里帰りや帰国事業、国籍や戸籍整理、貧困者の救済等、多くの仕事をしてきたが、その記録は残念ながら残されていない。尚、芙蓉会の成立過程に関しては前掲の小林の論文に詳しい。
- 7) 谷富夫『過剰都市化社会の移動世代—沖繩生活史研究—』46頁(溪水社、1989)
- 8) 260名の登録会員を持つ釜山管轄支部(釜山、大邱、馬山、浦項)はラポール作りが遅れ、現在までのところ調査ができていない。今後の課題である。
- 9) 1945年の敗戦までは日本人と朝鮮人の結婚は国際結婚と見なされなかったが、1952年のサンフランシスコ条約発効後、「朝鮮人と結婚して内地の戸籍から除籍された者は日本戸籍を喪失する」という決定が下されたことにより、日本人妻たちの意志とは無関係に日本国籍を剥奪され、韓国籍となったという経緯も考えられる。
- 10) 分類の基準は非常に曖昧であるが、一応の目安として「上」を「不動産を多く持って生活にゆとりのある者」「中」を「持ち家があり、ある程度生活に余裕がある者」「下」を「持ち家は無いが、日々の生活に事欠かない。または家があっても、生活に余裕が無い者」「極貧」を「持ち家も無く、日々の生活にも事欠く者、特に住居費、医療費の捻出が非常に困難な者」というように芙蓉会では区分している。
- 11) 「ナザレ園」に関しては、上坂冬子『慶州ナザレ園—忘れられた日本人妻たち—』(中央公論社、1982年)に詳しい。
- 12) ソウルでは山側に行くほど住宅地としての条件は悪いと考えられている。ソウル市内の貧民街が山を無計画に切りひらいて住宅を建てた場所が多いので、貧民街を称して「山洞内」と一般的に呼んでいる。また、「タルトンネ(月洞内)」ということもある。
- 13) 冬の寒さが厳しい韓国では住宅に床暖房の設備が整っている。日本では「オンドル」

という名称で知られている。燃料に、最近では石油やガスが使用されているが、練炭を使用している家もまだ多い。尚、近年では「ボイラー」と呼ばれる床下にパイプを通して、その中に温水を流す形式の設備が普及しているが、その前は「アグンイ」と呼ばれる設備が一般的で、練炭の納入口のみが暖かいものであった。この設備では練炭から出る一酸化炭素による中毒が心配される。

- 14) 『朝鮮』100-101頁、(1931年(昭和16年)4月号、朝鮮総督府)
- 15) もちろん、「内鮮一体」政策の影響で朝鮮人男性との見合いを親族から勧められ、結婚した日本人妻もいる。
- 16) 5日に一度出る市場のこと。
- 17) 日本人妻が韓国に来て辛かったことのひとつに夫の浮気がある。多くの日本人妻が悩まされた問題なので、それを受けての発言である。
- 18) 朝鮮半島伝統の相互扶助組織。日本の「頼母子講」に類似している。
- 19) 日本人駐在員のアパートのこと。
- 20) 이동원 “한국의 가족의 변화와 여성” 여성학 이화여자대학교 한국여성학 연구소, 1990

(リドンウオン：「韓国家族の変化と女性」『女性学』梨花女子大学校 韓国女性研究所編)

- 21) 1986年5月19日付 『読売新聞』(夕刊)及び『サンケイ新聞』(夕刊) 参照のこと。
- 22) 蘭信三は「中国残留日本婦人」の日本についての心情には「望郷」「憎しみ」「諦め」「超越」という4つのカテゴリーがあると言う(蘭、1992年、298頁)。在韓日本人妻の日本についての心情にもこの分析はある程度適応できるのではないかと考え、「諦め」という言葉を使用した。
- 23) 1993年7月9日付 『朝日新聞』に関連記事が掲載されている。

<参考文献>

- 蘭信三「ある中国残留日本婦人のアイデンティティ」『戦時下の日本—昭和前期の歴史社会学—』戦時下日本社会研究会編、行路社、1992
- 『『満州』農業移民の生活史』『近代日本』の歴史社会学—心性と構造—』筒井清忠編、木鐸社、1990
- 上坂冬子『慶州ナザレ園—忘れられた日本人妻たち—』中央公論社、1982
- 金應烈「在韓日本人妻の貧困と生活不安」『社会老年学』No.17、1983
- 小林孝行「戦後の在韓日本婦人についての基礎的研究」『福岡教育大学紀要』第36号、第2分冊、1987

ある「在韓日本人妻」の生活史

奥村和子・桜井厚編『女たちのライフストーリー—笑顔の影の戦前・戦後—』谷沢書房、1991

プラマー・ケン(原田勝弘、川合隆男、下田平裕身訳)『生活記録の社会学—方法としての生活史研究案内』、光生館、1991

歴史学研究会編『オーラル・ヒストリーと体験史—一本多勝一の仕事をめぐって—』、青木書店、1988

鈴木裕子『従軍慰安婦・内鮮結婚』未来社、1992

谷富夫『過剰都市化社会の移動世代—沖縄生活史研究—』溪水社、1989

山本かほり「韓国留学便り 2」『KCIW ニュースレター』神戸女学院大学女性学インスティテュート、No.13、1992年9月

吉岡攻「忘れられたハルモニ—在韓日本人妻の37年—」『季刊 三千里』31号、1982年  
W. I. トーマス F. ズナニエツキ(桜井厚訳)『生活史の社会学—ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民—』、お茶の水書房、1983

(新聞記事)

『読売新聞』1986年4月19日、5月18日、5月19日

『サンケイ新聞』1986年5月19日

『聖教新聞』1986年5月27日

『韓国新聞』1986年5月31日

『東洋経済日報』1990年5月4日、5月18日

『朝日新聞』1993年7月5日

(韓国語文献)

이동원 “한국의 가정 생활과 여성의 역할” 여성학 이화여자대학교 한국여성학 연구소, 1979

-- “한국의 가족의 변화와 여성” 여성학 이화여자대학교 한국여성학 연구소, 1990

韓國社會學會 編 現代韓國社會問題論 한국복지정책연구소 출판부, 1991

## 要 約

어떤 한 “재한 일본인처(在韓日本人妻)”의 생활사  
--일본과 한국의 사이에서--

야마모토 가오리

본고에서 말하는 “재한 일본인처” (이하 “일본인처” 로 약칭함)는 일제시대때 조선남자와 결혼해서 지금까지 계속 한국에 살고 있는 일본인 여성을 의미한다.

그녀들이 결혼을 하게 된 경위는 다음과 같이 크게 세가지로 구별할 수 있다.

- (1) 일제시대때 일본에 살고 있던 조선남자와 결혼해서 해방(일본패전을 뜻함)후에 남편과 같이 한국으로 건너 간 경우
- (2) 해방전 부터 한반도에 살고 있었던 일본인 여성이 조선남자와 결혼해서 해방후에도 계속 한국에 살고 있는 경우
- (3) “만주” 또는 중국에 거주한 일본여성과 조선남자가 결혼해서 해방후 한국으로 건너 간 경우

이 셋중에서 (1)의 경우가 가장 많다.

현재 “일본인처” 들의 한국생활은 거의 50여년이 지났고, 그동안 그녀들은 한국내의 강한 “반일 감정”, 한국전쟁, 정치적인 혼란, 한일간의 국교단절 등으로 인한 여러가지 사회적/역사적 사건을 경험하였다. 그리고, 개인적인 생활에서도 빈곤, 가족의 붕괴, 친지들의 외면과 地域사회로 부터의 고립 등 많은 어려움을 겪으면서 생활해 왔다.

그렇지만 그녀들은 그러한 상황속에서 자기의 삶이 주어지는대로 그저 묵묵히 받아들인 것이 아니라, 生活主體로서 자기 나름의 생활을 유지하며, 발전시키려고 노력해 왔다.

본고에서는 어떤 한 일본인처의 생활사 기록을 중심으로 “재한 일본인처” 들이 일본인으로서 한국에서 ‘어떻게 생활해 왔는지’ 그리고 ‘무엇에 의지하여 한국에서의 이국생활을 지탱해 왔는지’ 를 고찰해 보고자 한다.

당시에 “식민지 지배” 를 강요한 국가의 국민의 한 사람으로서 일본적

질서속에서 살아갈 거라고 생각하여 결혼한 그녀들이 해방후에는 상황이 반전되어 “한국문화, 한국질서” 를 받아들이면서 살아가야만 했다. 이처럼 상황이 반전되고 가치관이 다른 두개의 生活世界속에서 살아온 일본인치의 생활사를 연구하는 것은 일본과 한국이라는 두 개의 문화속에서 산다는 것(=이문화 경험)이 어떤 것인가를 우리에게 제시해 줄 수도 있다고 생각한다.